

ダヴィデおよびベネデット・ギルランダイオの画歴と 「セントルイスの画家」の同定

神戸女学院大学
伊藤拓真

本発表では、かつて「セントルイスの画家」の名でグループ化された作品群の分析を中心として、ダヴィデ・ギルランダイオ（1451-1525）およびベネデット・ギルランダイオ（1458-97）の画歴の再構成を行う。両者の活動は兄ドメニコの影響を強く受けており、個別の画家としては捉えがたいものになっている。ダヴィデは生涯の大半をドメニコと共に過ごしており、彼個人の基準作とすることができる作品は極めて乏しい。ベネデットに関しては、1486年から1493年にフランスに滞在したことが知られているが、初期のフィレンツェにおける活動はほとんど解明されていない。

1967年の研究において、E・フェイはセントルイス美術館所蔵の《聖母子と二聖人》を中心としてギルランダイオ周辺の15点の作品を同一作者に帰属し、その作者を「セントルイスの画家」と呼んだ。その後、フェイ自身を含む大多数の研究者は、この画家をダヴィデと同一視するようになる。しかし、両者の同定にはJ・カドガン（2000）やA・ベルナッキオーニ（2010）などによる否定的見解も提示されている。本発表においては、質感の描写や空間表現において、「セントルイスの画家」がむしろベネデットと多くの共通点を有することを指摘し、前者の作品群がフランス滞在以前のベネデットの初期作品であったと主張する。

「セントルイスの画家」の主要作品はいずれも1480年代半ばに制作された。これらの作品はギルランダイオだけでなく、ボッティチェリやレオナルド・ダ・ヴィンチ、ロレンツォ・ディ・クレーディといった同時代の画家や北方絵画などの多様な先行例を踏まえて制作されたものであり、画家が自身の様式を模索する段階にあったことを示している。また、スカンディッチの《マギの礼拝》など、1480年前後のギルランダイオ工房の作品の一部には、「セントルイスの画家」の特徴が見出される。以上を総合すると、「セントルイスの画家」は1480年前後にドメニコ・ギルランダイオのもとで修業を行い、1480年代半ば頃から主体的な活動を開始した画家であると推定できる。このような活動内容は、ベネデットの経歴について知られている事実と合致する。文書史料によれば、彼は当初、写本画家を目指すが眼病によって断念し、1480年頃からおそらく兄たちのもとで画家としての修業を積んだ。代表作である《降誕》（エギュペルス）をはじめ、現状でベネデットに帰属される作品はいずれもフランス滞在以降のものであり、その初期段階の空白を「セントルイスの画家」の作品群が埋めることになる。

本発表の成果は、15世紀後半のフィレンツェにおいて主導的な役割を果たしたギルランダイオ工房の解明に寄与することはもちろん、フィレンツェとフランスの双方で活躍したベネデットの画歴を把握することで、イタリア・ルネサンス美術と北方絵画の関係にも新たな視点を提供するものになる。